

## イメージを喚起する — 平田家就『イギリス挿絵史』 —

子供の時読んだスティーブンソン『宝島』ヴェルヌ『海底二万マイル』のあらすじはすっかり忘れてしまったが、ドラマチックな挿絵は印象に残っている。物語の添え物と位置付けられがちだが、古来挿絵※・イラストレーションは物語にとって大きな役割を占めている。(菊地実)

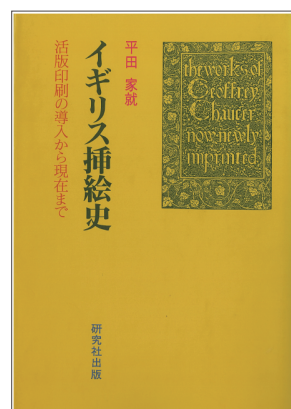
### ユニークな研究

和歌山大学は茶・時計など経済史に大きな業績を残した角山栄を始め、ユニークな学者を輩出している。本書著者はトインビー本研究者・翻訳者として知られる英文学者。サブタイトルに「活版印刷の導入から現在まで」とあるように、印刷技術変遷と挿絵の関係を分析している。

挿絵・イラストの一般定義「ペン画＝彩色のない線だけの絵」とあるものの、古代筆写本は「平清盛が厳島神社に奉納した平家納経に入れられた美しい大和絵・・・敦煌で発見された世界最古の印刷『金剛経』巻頭の祇園精舎における釈迦說法」(1頁)と豊かな色を持っていた。筆写本挿絵は古今東西絢爛なものが多い。代表例としてはブルゴーニュ公国『ペリー公の最も豪華なる祈禱書』(15世紀末)、羊皮紙にテンペラ彩色された華麗な細密色彩画である(特に青が美しい)。

### 挿絵の位置付けと印刷技術

「西欧において挿絵の本質を自覚的に考えるのは・・・19世紀末のウィリアム・モリスが私版所を設立し、理想の書物の制作に携わる」(1-2頁)。以下コブデン・サンダーズや民芸運動創始者・柳宗悦や寿岳文章を挙げている。「挿絵は本文の内容を語る機能と書物を飾る機能の両方を果たす」(3頁)、さらにモリスは表紙・装丁に凝り、本を工芸美術品としていた。本誌前号の「蒐集異聞【六十九】」で紹介した大正イマジユイ本の多くは、そうした美術工芸運動に影響されている。



< 研究社出版 >

本書は<図表1>のような構成。挿絵は活版・木版・銅版・鋼版・石版・写真製版といった印刷製版技術と共に、時代の美術様式と密接に結びついている。グーテンベルグによる最初の活版印刷<42行聖書>はタイポグラフィの美しさで知られている。英国活版印刷は、ドイツで印刷をマスターしたウィリアム・キャクストンに始まる。挿絵は活版と別に、単純な木版で刷られている。キャクストン『イソップ寓話集』(1484年)『カンタベリー物語』(1484年)は、「挿絵は稚拙で、黒先の輪郭で陰影がない単純なもの」(22頁要約)だったが、木版技法はやがて大陸から導入された銅版により、絵は急速に形を変えていく。十七世紀に入ると大陸出身の銅版画家が緻密な挿絵を提供した。代表例は『シェークスピア第一・二折全集』(1622年)。その多くはドイツ・オランダ出身者が手がけ、建築家クラインのようにイラストは余技だった人も多い。

なを、十八世紀のブレイク(詩人・画家・建築家)の銅版画による詩集は、時代を超えた技法で後世に大きな影響を与えている\*1。

## 専門の挿画家

出版が盛んになるにつれ、挿絵家も余儀ではなく独立した職業「イラストレーター（専門）」となっていく。ウォルター・スコット歴史物作品「四折版には大きな銅版画九十四枚も収められている」（77頁）、さらに十九世紀初頭勃興したロマン主義詩人バイロン卿全集では、肖像画23点と風景画32図が収められた本（銅版画）も発行されている\*2。宗教・神話・肖像画中心だった西洋も十八世紀からは風景画が増え、特に英国ではそれが顕著だった。英国を代表する風景画家ターナー（今や作品価格はゴッホ・セザンヌを上回ると言われる）も、多くの本に挿画を書いている。内容はヨーロッパの川の旅で、細かいスケッチ的銅版画である（85頁）。

## マス出版時代と製版技術革新

ヴィクトリア朝は新聞も含め、文学（小説）黄金時代。挿絵にも技術革新が訪れる。それまでの銅版画ではなく「活字と一緒に印刷される木版が再度利用される」。それは木版の電気版複製が主力で、代表的作品はディケンズと画家クルクシャンクによる『オリヴァー・ツイスト』。個性が強く、描く場面・内容を指定するクルクシャンクに対して二人はやがて疎遠になるが、「ディケンズは自分の作品の挿絵についてやかましく、作品を描く際にあらかじめ絵にする場面を決めていた」（97頁）。当初は画家の方が有名だったが、作品成功でディケンズは主導権を取り戻した。

作家と挿画家の関係で双璧をなすのは、十九世紀後半二組のコンビである。

『不思議の国のアリス』（1865年）における作者ルイス・キャロルと挿画家ジョン・テニエルである。挿絵に関心が高かったキャロルは自身でもイラストを描き、「作者が画家に絵の内容をスケッチで示し、画家も作者に文章修正の意見を述べる」（109頁）。また本書ではないが、

## ＜図表＞本書の構成

序章	挿絵史の諸問題
第1章	活版印刷の導入から16世紀まで（1476－1600年）
第2章	17世紀（1601－1700年）
第3章	18世紀初頭から第三・四半期末まで（1706－1775年）
第4章	18世紀第四・四半期から19世紀30年代まで（1776－1836年）
第5章	19世紀30年代から世紀末まで－ヴィクトリア朝（1838－1901年）
第6章	20世紀初頭から第一次大戦終結まで（1902－1918年）
第7章	第一次大戦終結から第二次大戦終結まで（1919－1945年）
第8章	第二次大戦終結から現在まで（1945－1990年）

### ＜本書より＞

キャロルが負担した最初の初版印刷にテニエルがクレームをつけ、再度擦り直している。いずれにしろアリス像は、テニエル描くイメージが長く定着した。

もう一つの例は世紀末、オスカー・ワイルドとオーブリー・ビアズリー\*3である。「怪奇・幻想・エロスの世界を都会的・退廃的・シュールレアリスムの感覚で表現し、当時の人々にとって極めてショッキングな挿絵を発表した・・・『サロメ』（1894年）は装飾画のようだ」（149頁）

## 内容理解に不可欠

今回は文学作品を中心に紹介したが、挿絵は旅行記・博物学にも最も有効である。例えばダーウィン『ビーグル号探検記』などは、動植物や地勢のイラストが理解力を高める。

本書は英文学史と同時に、近世英国美術工芸史でもある。挿絵・イラストから漫画が登場したように、美術／工芸／商業美術というランクづけをするとは今やナンセンスであろう。

※挿絵は一般的に「挿画（そうが）」を使うことが多い。

\*1：ブレイク詩集に啓発されたのが寿岳文章で、私家版で翻訳。のちにダンテ翻訳から和紙研究に入った。和紙研究は本紙でも取り上げている。

\*2：銅版画はサントリー美術館で回顧展が開催された。

\*3：オーブリー・ビアズリー（1872-98年）の展覧会も本年東京で開催。世紀末美術やアール・ヌーボーで伝記も多い。

■筆者／ 平田家就（ヒラタ・イエナリ）、1918年東北大学法文学部英文科卒業、和歌山大学名誉教授。著書「トインビー研究」「ビューイックの木版画」他

■書誌／ 1995年12月1日、研究社出版発行、A4判・282頁